



トキオキファンタジー
フ★ア★ル★

01.始まりは、

気がつくと、私の目の中には天井が見えていた。頭の中は真っ白だった。唯言葉を話せるだけで何も分からなかった。

「あら、あなたも目が覚めたのね」

一人の眼鏡をかけた女の人が私に話しかけてきた。私は布団からもぞもぞと起き上がって彼女のことを見つめる。青い髪がふわっと一瞬だけ舞う。

「初めまして、私はここジエンディア大陸の小さな倉庫の管理人、アンネです。あなたは...」
微妙な間が入る。冷や汗が後ろから出てくる。こんなに出るものなのか。

「やっぱり...あなた、別大陸の人でしょう」

アンネのはやっぱり、といった安心とも言えないが少しホッとしたような顔ぶりをみせる。

「そういわれても.....記憶がないんです。名前も、家族も、元いた場所も」

「あら、じゃあそこの少年と同じじゃない。彼も記憶がないみたいよ。しかも同じ場所で倒れていたしね」

(ん...もしかしてあれなのか)

さっきから倉庫に置いてある剣やら盾などの物をぶんぶんいじり倒してる少年が真っ先に視界に入った。そして振り回しながらこっちに向かってきた。

「やあやあ。何か一緒に倒れてたらしいねー、見て!この剣の輝いてる感じ!かっこいいよなー...これ!」

当たったらどうしてくれるのかとうすうす思いながら視点をアンネに戻す。剣に「初心者用両手剣」と書いてある紙が貼ってある事も知らずにかっこいいなんて言ってることを彼は知らない。

。

「ね、ね!アンネさん。俺ら二人に名前付けてよ!アンネさんは命の恩人だしいいでしょ?」
期待のまなざしでずんずん迫ってくる。

「えっと...運んだのは私だけど見つけて助けたのは赤い帽子をかぶった眼鏡の二つ縛りの魔法使い...」

アンネも眼鏡なのだが。その瞬間、ドアが開いた。外から今さっきアンネが言った条件にピッタリの魔法使いが入ってきた。カランカランと鈴の音が店内に響き渡る。

「そうそうこの子!」

二人のまなざしが魔法使いに行く。

「やっぱり心配だから見にきたら二人とも起きてたんだね、よかったー!」

小走りでドアから二人の元へ行く。

「あなたが...助けてくれたの?」

青い髪の少女は尋ねかける。すると魔法使いは満面の笑みで頷いた。

「じゃあ...まずはお礼だよな!ありがとう!赤い帽子をかぶった眼鏡の魔法使いさん!」

「よく全部ソレ覚えてたね...私の事はエフェクトでいいよ」

苦笑しつつも軽く自己紹介するエフェクト。

「あのさ...エフェって呼んでもいいかな?」

よく見るとエフェクトは二人と見た目だけ見ると年齢層が近い。青い髪の少女が親しくなりたくも無理はない。

「うん、いいよ」

またの満面の笑み。彼女の満面の笑みに勝てる人はいないのであろうか。自然と少女にも笑みがこぼれた。そこに茶色の少年がエフェクトの前に飛び込んでくる。

「あのさ...俺達二人とも何も覚えてなくて名前すらないんだ。」

「...うん」

「それで...命の恩人のエフェに名前付けてもらいたいんだ!頼む、お願いします!」

神頼みするかのように手をパンッと合わせて言う。それを見たエフェクトは一瞬だけ目を点にさせて少し唸るように考えながら何か思いついたかのように手をポンッとやった。

「右の女の子がライトで左の男の子がテール!どうどう?」

どうやら自身大ありのようだ。アンネは何か気づいたようだが記憶がない二人は喜びながら魔法使いのもとに駆けつける。お礼をしてるようだ。

「よろしくね、ライト、テール!」

「よろしく!」

「よろしくな!」

そしてありがとう、と。

「アンネさーん。倉庫にある武器いくつか二人に貸してもいいでしょうか?あ、あと防具も」

「かまわないわよ。エフェクト案内してもらえる?はい、鍵」

エフェクトは返事をして鍵をもらい二人を連れて武器庫に向かった。

「ここってラテールワールドとも言うんだけどエフェクトはそれから取ったのかしら」

ライトとテールを合体したらライトの面影が薄くなるような気もしたがそんなことは気にせずアンネはテールが散らかした武器を元の位置に戻す作業を始めた。

「うわー...すごーい!」

エフェクトが開けた倉庫のドアから見えたのは部屋の中いっぱい剣やハンマーに盾、杖や弓にカバン。とにかく各人の職業に合わせた武器がたくさんあった。

防具などは初心者用・中級者用・上級者用とおおまかに巨大な黒いクローゼットにはりがみを張られて区切られていた。

「革ヘアバンド...ルビーヘアバンド...それに、フレイムホーン?」

「防具の名前よ。防具自体に特別な耐久性があるからモンスターの攻撃もへっちゃらになるのよ。」

ほう...と納得しながらライトは防具と言って頭に浮かべたものよりもはるかにかわいいので心を浮かせていた。一人無言ですっとある武器を見ている。二人が近くに行きよく見るとテールは

02.初めての

ここは山林地帯。森だどが生い茂っていてとても空気が良くモンスター達も住み心地がいいらしい。木の実や食べ物が土の中に埋まっていたりするので人間、モンスター両方が奪い合いになること多々。そしてその山林地帯で三人が最初に来たのはペロスを出て右に100mくらいの場所でロープなどが各段差に設置されており人が通っていった感満載の場所であった。現に今も違う場所で初心者の人が鍛錬している。

「じゃあ頑張ってね。これ回復薬。死にそうになったら飲んでね。」

二人はお礼を行ってとりあえずなにかぶにぶにした物体に突っ込んでいった。

「これか!ぶるぶるぶにぶにしたプリンみたいな物体みたいな何か!」

「それを略してプリン!何でそんな長いの言われるの...ってうわ!動いた!こっち見た!.....
...ツツツ。」

ライトが持っていた剣でツンツンプリリンを触ってみた。とてつもなくプニプニしている。剣の感覚からでも分かる。感触は某ゲームのすらなんとかレベルだ。しかしそんな天国もつかのま、触りすぎてプリリンは怒って突進してきた。

「いでっ!ちょま!二ひぐばあ!さんよっでまで!いであだだだだ」

何を思ったかプリリンは剣でつんつんしたライトはそちのけにテールの方ばかりに集団で襲って来た。いくら防具をしているからといってもさすがに痛い。

「ったくしょうがないな!」

「だだだ...あれ?痛くない。」

目を瞑りながらライトの方を見るとライトが持っていた盾でプリリンの攻撃を防いでいた。

「早く回復薬飲んで攻撃して!抑えるのが精一杯!」

「お、おう!といやっとあれれ、今度こそ!とお!!」

肝心の一発目は軽くすかして失敗に終わったが二回目で一発目の失敗を取り戻しプリリンを一瞬にして消し去った。なにやら目玉やら尻尾やらが転がっていたが見なかったことにした。

「いやーいろんな物ドロップするねー。ホラ!よく分からないボックスなんかも落としていったよ!ラッキー」

「ラッキーボックスか?」

のちにそれがトキメキボックスだと分かるのは次の日のことであった。

それから二人はとにかくプリリンを倒して倒して倒しまくっていった。

「頑張ってるな...二人とも。ひょっとしたら.....二人ならあそこに行けば何かあるかもしれないな。」

一方その頃エフェクトは何か考え事をしていた。良くも悪くもない何かを。

「エフェクトー!収集品こんなに手に入れたよー!ふふーん」

自慢げに袋いっぱい尻尾やら目玉やらなどを突っ込んであるのをエフェクトに見せた。

「もう回復薬切れだよ...スマン、これ売って回復薬買いたいんだ。」

「ああ、それならこの先に旅人の休憩所って所があるからそこで買うといいよ。それに……」

「？」

「どうしても見せたい場所があるんだけど…いい？二人なら見えるかもしれない。」

真剣なまなざしで二人をみるエフェクト。そして二人は頷いてこう言った。

「それってお化け？」

この世界にお化けなど存在するのだろうか。

03.少女との出会い

ささやかな風が頬を通りつつ三人は歩いていった。奥へ奥へ。何か不思議な雰囲気をもった風が三人を覆う。

「——ついた」

平坦な声で呟くように言う。エフェクトが指差す場所にはなにやらベロスという町でも見た石塔があった。石塔—それからはなにやら神秘的な雰囲気をまとっていた。悲しくもないし、楽しくもない、不思議な。

「これがどうかしたの...?何か神秘的で綺麗だけど...」

そう、感じ方によっては綺麗ともいえる。

「石塔に触って、見て」

いつになく真剣な眼差しで二人に向かい面と向かって言うエフェクト。どういうことなのかさっぱりわからない二人であるがとにかく石塔に触ってみることに。すると、

二人が触った瞬間、光が三人を覆いつくす。現れた光は次第に粒になって少女を生み出していく。

「...ん、う。っておおう!?何か一人増えてる!?!」

見ると石塔の場所から少女が映像のように映し出されていた。光に包まれてどことなく光り輝いてるように見える。

『...エフェクト。あなたが二人を連れてきてくれたのですね。この世界に現れる力持つものを』

「...まあそういうことになるかな。」

「スマン、状況が掴めない。この人は誰なんだ?力持つものって何なんだよ?」

テールの一言から場が一転した。

『...私の名前は「イリス・イヴィエール」。.....どうしてもあなた達の力が必要なのです。どうか、どうか力を貸してください。』

イリスは悟る。

『あなた達にお願いします。...私を見つけてください。必ず、見つけてください。』

イリスは語るとノイズ交じりに石塔から消えていった。少しだけ嬉しそうに微笑みながら。

(石塔をたどればまた...出会えますよ)

声は徐々に消えていった。

「...結局力持つものについて教えてくれなかったな。エフェクト、何か知ってるだろう。」

「あたしも良く分からない。前偶然石塔触ったら別世界の二人を連れてきてくださいって言われたただけだもん。そしたらすぐに消えちゃった。」

「イリス...誰なんだろう」

三人の思考がイリス・イヴィエールのことだけになった。

「...へえ、そんな事があったの」

アネスがPCに向かい仕事をしながら答える。三人はたんと話を進める。

「それでさ、アネスさんはイリスのこと知ってる?何かその...情報とか、」

「うーん.....噂、の方でもいい?」

コクンと頷く二人。

「ここから少し遠い「赤龍の巢」っていうプルトン神殿の奥にある洞窟みたいなところかな。そこにイリスと昔旅した冒険者がいるって話なのよね。...誰から聞いたのかしらね。ああでも三人で行くのは少しキツイかもしれ」

喋りながらアネスが振り向くとすでに三人の姿はなかった。残っていたのはその場に残った微かな香りだけであった。

「やられた...な」

イスにドン、と座りながら吐き出すようにアネスは呟いた。好奇心旺盛の子供は本当に困る。しかしそれがまたいいところなのだ。あの時の彼女のように。

04.赤龍の巣:前編

赤い空が濛々としてる赤龍の巣。先の道も赤く灼熱の炎で包まれている。グツグツと煮え立っているマグマが道を覆っていてモンスターに襲われたらひとたまりもない。そして三人は灼熱に包まれた大地の道を走りだす。

「うわ...あっついねここ...エフェクト一本当にこの先行くの?もしいなかったらあたし達ここの主に食べられちゃうかもしれないよ」

「まあ...ここまで暑いのは少し予想外かな。でも行かないと謎が永久入り。一番もやもやするよ!」

「珍しく真剣だな...まあおもしろいから俺は良いんだけどな」

この場所で他愛もない話をできるのも一つの特技かもしれない。何事もあせっては解決しないという言葉が似合うだろう。

(それに...もしもの為に一応応援呼んだんだけど...間に合うかな)

そんなエフェクトの考えは誰にも分からない、分かるはずがない。

三人はさほど強くはないのでモンスターからはなるべく逃れ逃れで回復と防御を中心に奥へ奥へ進んでいった。リザディや騎士パーシブルファイリエ

「うわっちい!何だコイツ!」

「そのちっこい炎出すのはファイリエ!気をつけないと大火傷するよ!」

エフェクトが走りながら注意する。言ったワンテンポ遅れあたりでファイリエが炎を上下左右に召還して繰り出す。そしてその攻撃をライトが盾で受け止める連帯コンボ。最終的にエフェクトが受けたダメージを回復させる。

「いいね一、シールドっていう職業。誰かを守るって何か素敵。やりがいはあるっていうか」
ライトが少しだけ微笑みながら独り言を言う。小さく。記憶がない今残っているのは心と感情。ひょっとすると何か関係あるのかもしれないがきっと分かる日はまだ来ないだろう。

「しかし改めてみるとすごいね...こういう場所あるんだね。でもあたし...なんか懐かしい気がするんだよね、ココ」

すると、意外な返事が返ってきた

「ん?ああ、二人ともここで倒れてたよ。ちょっと見回りに逃げつつ奥に入るギリギリまで言ったら奥のギリギリの所で倒れてたな一確か」

「それって...アレか。俺らここの主に戦う直前にぶっ倒れたって考えたほうが無難だよな。」

「ん...まあ確かにあそこらへんは毒ガスとか炎の刃とか...まあいろいろあるもんね」

その瞬間すごく暑いはずなのになぜか一瞬二人の背筋はとてつもなく凍え寒くなった。

「でもなんか違うような...気がするような」

「ハァハァ...ハーけっこう奥まで進んだな」

「もう先が見えない...霧があって見えないけど、多分主の赤龍がいるよね。これは」

「ええええ!?さ、避けれないの?主さんは...」

驚いて後ずさりをするライト。

「だといんだけど...ね」

エフェクトが試しに杖の攻撃をためて目の前の謎の霧に隠れた物体に当ててみた。

その時、鼓膜が破れる程の巨大な物体の叫び声が巢に響き渡っていった。

「これが...赤龍なのか!?!」

「回復重視で行くね!ライト防御と攻撃、テール攻撃重視、無理しない程度にお願い!」

「うい!」

(お願い...間に合って)

エフェクトは心の中で叫びながら祈っていた

『ねえムーウエン、あいつら誰だろう』

『ひょっとしたら.....悪者かもしれないね』

どこからかの岩陰からのコソコソ声が三人に聞こえるはずがなかった。

05.赤龍の巣:後編

「エフェクト!回復頼む!」

「ハイ!」

強すぎる赤龍の巣の主、インヴォーグと三人は必死に戦っていた。

「防御が...ぜんぜん聞かない!いだっ!」

「ハイ!」

「どうして...どうして回復がまったく聞かないんだよ...!こんなに攻撃してるのに!」

「!テール危ない!」

悲痛な叫びも一歩遅くインヴォーグの炎がテールの前を包みこむ。

炎の奥から二人が想像した姿は見えてこなかった。見えてきた姿は一人の少年がテールを攻撃から守っている姿であった。

「兄貴!間に合ったんだね!」

「へ?あに...き?ってえ?どういうこと?エフェクト」

テールが無事だったのをよそにライトはそっちに興味があるようだ。ちなみにテールは呆然のあまり目がテンになっている。しばらくこの状態が続くだろう。

「フフン、初めましてだなー。職業ダークナイトでそこのへっぼこ魔法使いの兄のディスだぜ。」

「いいから兄貴後ろ、インヴォーグがお怒りに」

正直のこの状況で自己紹介なんかしてる余裕はない。インヴォーグの炎がディスの真後ろに来る。

「甘い」

言った瞬間に左の手で軽々炎を受け止めた。

「フンッ!」

そして一瞬にして跳ね返しインヴォーグ消え去った。

「すげえ...ダークナイトっていう職業ってこんなにすごいのかよ...」

やっと喋りだしたテールの最初の発言。当然皆も同じことを考えてる。

「あ!ごめん!今日初心者の人にいろいろ教えないといけないんだっ!インヴォーグいないし頑張れよおまえらー」

すごい勢いでディスは去っていった。

「あたしもなれるのかな...あんなに強く」

「ちょっと待ったあ!」

「誰!?!」

このなんとも微妙な空気につっこんできた二人の少女と少年がいた。

「ねえ!早くこのインヴォーグの手下の召還モンスター倒そうよ!」

「うん...服もダサイしこのセンスのなさは間違いなく...そうだね!どうする?ジョエ」

「ハアア!?ダサイ!?ダサイって今言ったねあんだ!」

ライトは服の事を言われて何か怒っているようだ。

「ムーウエンちょっと待ってて、アタシがちょいちょいって片付けちゃうから。」

「ん...ムーウエン？」

エフェクトのセリフが少し遅かった。

「覚悟っ!!」

ジョエが魔法を思いっきりライトにぶつけてきた。しかしライトは盾で防いでいたためかゆくもなんともない。

「甘い」

「あのー...ライトさんー?その...、セリフかぶってますよ？」

珍しくテールが突っ込みになるこの状況は間切れもなく異常事態だ。

「ていああ!!」

「うああ!!」

ライトの攻撃にあっさり吹き飛ばされるジョエ。それを見てムーウエンは急いでジョエの元に駆けつける。

「ジョエをいじめるなー!!」

ムーウエンの言葉が回り回りに響き渡る

「ちょっと待って!あなた、ムーウエンって言うのよね!イリスと一緒に旅した仲間の!」

エフェクトが言葉を突きつける。

「イ、イリス!?何でキミイリスの事知ってるの?」

「私たち二人にイリスが名前を教えてくれたの」

「.....イリスが。しかも石塔と関係が...ね。これは何かあるかもしれないな」

しばらく間が空く。

「うーん、分かった。今度、今度だよ。ゆっくり話すよ」

「え!?ムーウエンマジで!?こんな連中に教えちゃうの!?うそかもしれないよ!？」

そうやって二人は赤龍を後にした。どこへ行ったかは分からないがすぐ会えそうな気がした。

「なんか...いろいろありすぎて頭ゴツチャになりそう」

頭を抱えてライトが唸っている。

「俺も...大丈夫かな、この先」

「分からない...分からないけど、でもなんかトキメキしそうな出来事が起きそうじゃない!?このラテールワールドでさ!」

スッとエフェクトが立ち上がる。

こうして三人も赤龍の巣を後にしたのであった。

後日、ムーウエンとジョエとはエリアスという町で再開できたとき

Tobe Continued.....